

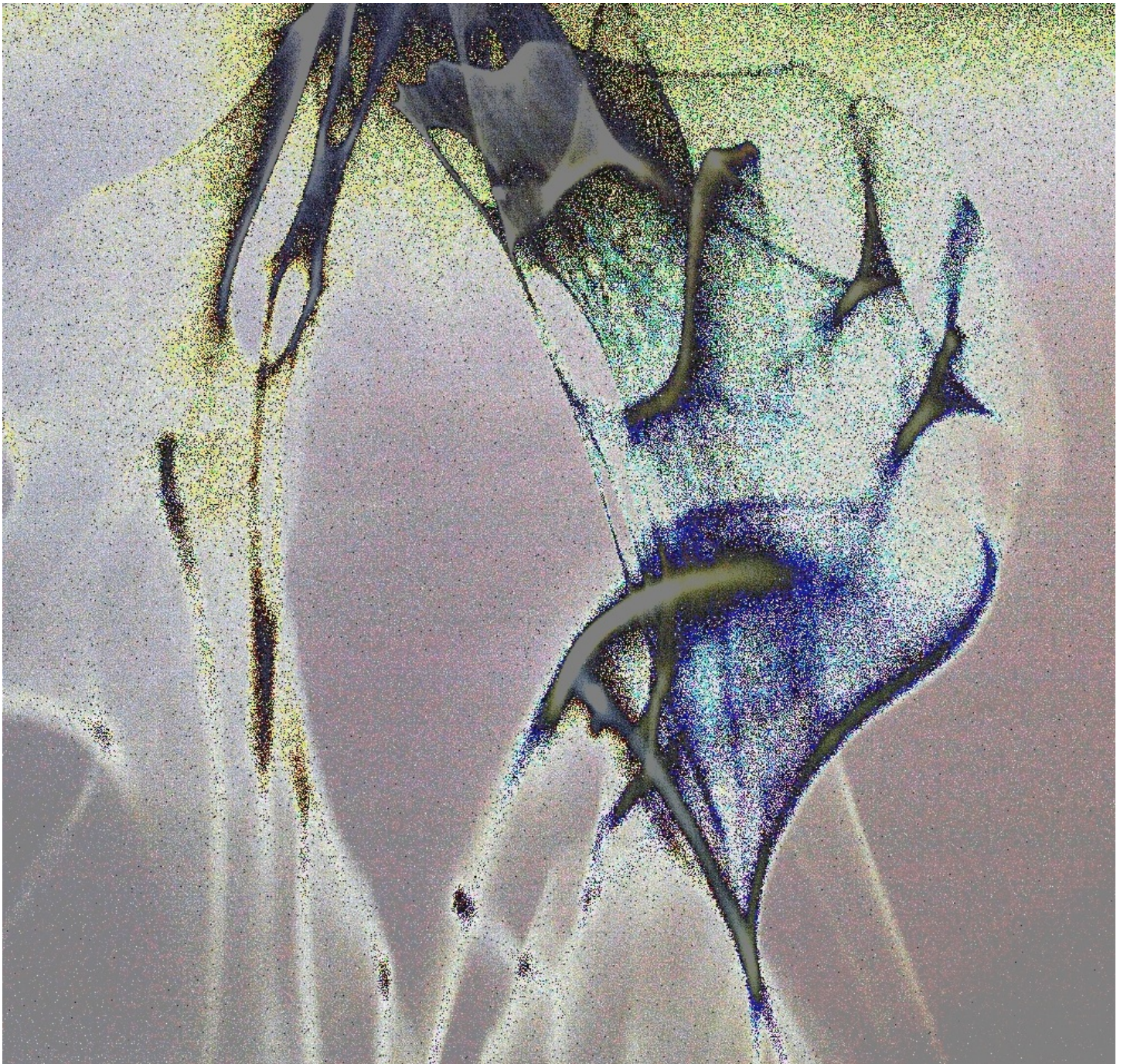
WANI-PRODUCTION

詩篇

兇器 L 調書

仲山 清





section 1

なぜひとつの事件が空白でありうるのか

モデルN嬢は実在したのか。

疑惑がひとたびかれの脳裡に枝をひろげると、たちまちおびただしい葉むらが、視界を曇らせてしまうのだ。

あるいは葉むらのはてに、疑惑が見えかくれするといってもよい。

そのときかれが掌中におさめたいのは、N嬢ではなく、まさに疑惑そのものだ。



ところが疑惑は疑惑で、N嬢をモデルに、かれの夢とうつつのあわいを跳びはねている。

疑惑とN嬢とのあいだに、せめて一条のぬくもりでもあればと、かれは思うのだ、ぬくもりでもあれば、あらゆる仮定は、かかとをしっかりと地につけて歩いてくるだろう、それはおれを踏みにじっていく輝かしい定理だろう。

しかし、モデルのその不定形さが、N嬢であり疑惑なのだ。実在が、非在が、なんだろう。モデルからN嬢へ、また、おれを通りすぎていく後ろ姿が、なんだというのだ。

N嬢は、風のそよぎかたをそよぎ、草ぐさの渚を波うつ。

横たわると、N嬢は、しきつめた若草そのものだし、カメラマンの気まぐれにそそくさとしたがって樹の幹にすぎると、N嬢はそのままやさしく樹である。

肌は日本人らしい白さで白く、それは透明なうすく湿った黄いろい皮膜につつまれている。指は十分な機敏性をそなえて、しずかなしわをうつしだしている。だが、その肉体的な属性から、1メートル程度ひきはなされると、もう汗ばみ、五月の風に同化してしまう。

だから男たちは、突飛な行動にわれを忘れることも可能だった。いやすでに行動は起されていた。N嬢の姿態のひとコマひとコマに、男たちの慾望が介入していた。

何事があったのか、なぜひとつの事件が空白でありうるのか、解明されぬまま、N嬢に関する諸々の事象は、かれに痣となつてのこる。

## section 2

### レモンの狂気

けっきょく、ぼくは、レモンがかつて狂気のままに蒐集したおびただしい曲線の、ただの一本も盗み出せなかった。

あの酸味と色彩、そしてぼくを酔わせた透明度は、あいかわらず隆起と陥没をくりかえしていたが、レモンの自閉症は、ますます完璧だった。その表面のなめらかさは、いかなる破壊欲をも芽生えさせなかった。いまや動かしがたく、狂気のままのレモンだった。

ひとすじの曲線を搾取されて、この春の初めから、いま冬にさしかかるまで、いったいなにをぼんやり生きてきたのだろう。桜が蕾をつけはじめると、もう、満開の花の下で曲線が曲線を生むぼく自身の繁殖を夢想したのだった。

世界は気泡のように昇天を静かに堪えている。ぼくが前進するところに〈もの〉はない、前進するぼくが唯一の〈もの〉である……

ところがじっさいは、ぼくのかたわらを陥穿がはしりつづけ、レモンの自閉症よりも、ぼくは、この少女めいた滑走が不安でならなかった。

春から夏、そして冬へ、弓なりの嗟い。

### section 3

髑髏のような恍惚よ

洗面器には、初冬の水が施錠されていた。台所ばかりではなく、家ぜんたいが洗面器の上に聳えていたのかもしれない。なにもかも見透かされているような背すじの寒さは、たぶんそのためた。

だれも水の名をしらない。しかしそれは蛇口を吃らせ、洗面器に満ちる。

おんなは聞きとめたことを疑った、《そんな言いかたってあるだろうか》と。

掬いあげると、掌の中で水もまたはげしく吃った。薄命な水、それより速く腐敗する掌。凍るひかりを瞼にあてた、それが点火となった。火花が散り、小爆発の衝動が眼球をつつみはじめた。

朝の時間が白濁し、夜の内臓が洗面器のひかりを砂に変える。彼女は夢から醒めきれずにいるのだ。

繊弱なひかりの下のうとましい風景、不倫の川を流れるどくろのような恍惚が、彼女の顔にかさなる。この顔をどこに向けたらいいのか。

バスタオルは、かすかにきな臭い。《これがわたしの憎い体臭、あの気がかりなことばから、言いつくされなかった心根へ、〈もの〉から夢への転落にわたしをいざなう憎い体臭》

## section 4

### はねより軽い埋葬を

それは、ぼくの夢のなかで育てあげられた土を、夢から醒めた朝、ぼくの冬枯れの手が練り、築いた堤防である。

堤防のむこうでは、だれかが、かさこそと包装紙のしわをのぼしている。まだ見られたことのない夢が、しわのひとつひとつに自らをとどめておこうと、あのしなやかな掌に抗っている。

ぼくの夢のなかで土を育ててきたのは、土に還るべき死者や、そのほかの腐敗物などではなく、殺意に満ちみちた男たち、数多のアルビノの群れたちだ。憎悪と執念に燃えさかる潜伏、冷酷一徹の泳法が、夢から夢へと装置されたベルト・コンベアの上で、フラスコの中で、加熱と冷却をくりかえし、弾力性に富んだ、そしてきわめて緩慢に揮発する土を産んだのだ。

堤防の上には、堤防そのものよりも重圧的な水蒸気がたちこめている。かれらは自分が何者であるかすっかり忘れはてて、立ちつくしている。堤防のむこうが見えないのは、そのためだ。

ぼくの夢のなかで育った土には埋葬の重さがない。殺人者やアルビノの群れは、すでにぼくに見られてしまった夢の囚人として、永遠に生きるしかない。

## section 5

神経を除去されたテーブルの上に

かれが否応なしに犯罪者であるとき、かれの外延をめぐる心臓はもっとも安らぎ、背は呼吸を荒らげ、盲目の眼となって全存在を匿まう。かれはいま物Fを奪うのではなく、物Eとしての発熱が物Fをして溶解せしめるのである。いわば、二者の均衡は、発熱から発汗への音階的過程に組入れられている。

あらゆる犯罪は耳に快く、耳自体に集約できる。ちなみに、平均台をわたる少年を見よ、かくも蝶を髣髴させる腕のひろがり、そのまま犯罪へのかぎりない憧憬ある。ふらつく足はすでに消えかかり、かれの耳は何にもまして熱い。

罪の重さとは、テーブルがかかえている重さである。このテーブルにいかなる神経がかかっていたか、その分析、抽象が罪の重さを決定し、テーブルは、いまやそこにはない物の重さ以上の桎梏を加えられる。たとえばそれは撃叩され、あるいはくつがえされる。

穴のあいたテーブルがある。もろもろの神経が抜きとられた痕跡であり、罰、または物Gがこれをふさぐ。ところがなにびとも、罰、または物Gをこれに加算できない。穴は罪でありつづけ、それは、身をのりだして自らの足もとを確認する機会を、われらに与えつづける。

## section 6

家族がそれぞれ射程距離内にいれば

かれも、ときには猟に出た。

夕食前の無味乾燥なテーブルに、まだぬくもりのありそうな獲物をどさりと置く、すると俄然、家じゅうが活気づく。かれは満足する、死臭がたちのぼるなか、やつらが射程距離にはいつてくる！

しかし、あれをはたして《猟》といえだろうか。たしかに銃の重さは腕から肩へ緩慢な速度でながれ、肩をまるやかに、背ぼねへむけて横すべりに落ちるのだが、背にひろがりながら、銃としての実感希薄になり、銃とかれ自身との境界を曖昧にしてしまう。背から腰へ、脚へ、そして爪先に至って、その重さは何のものともつかず、かれを大地に釘づけにしているのである。

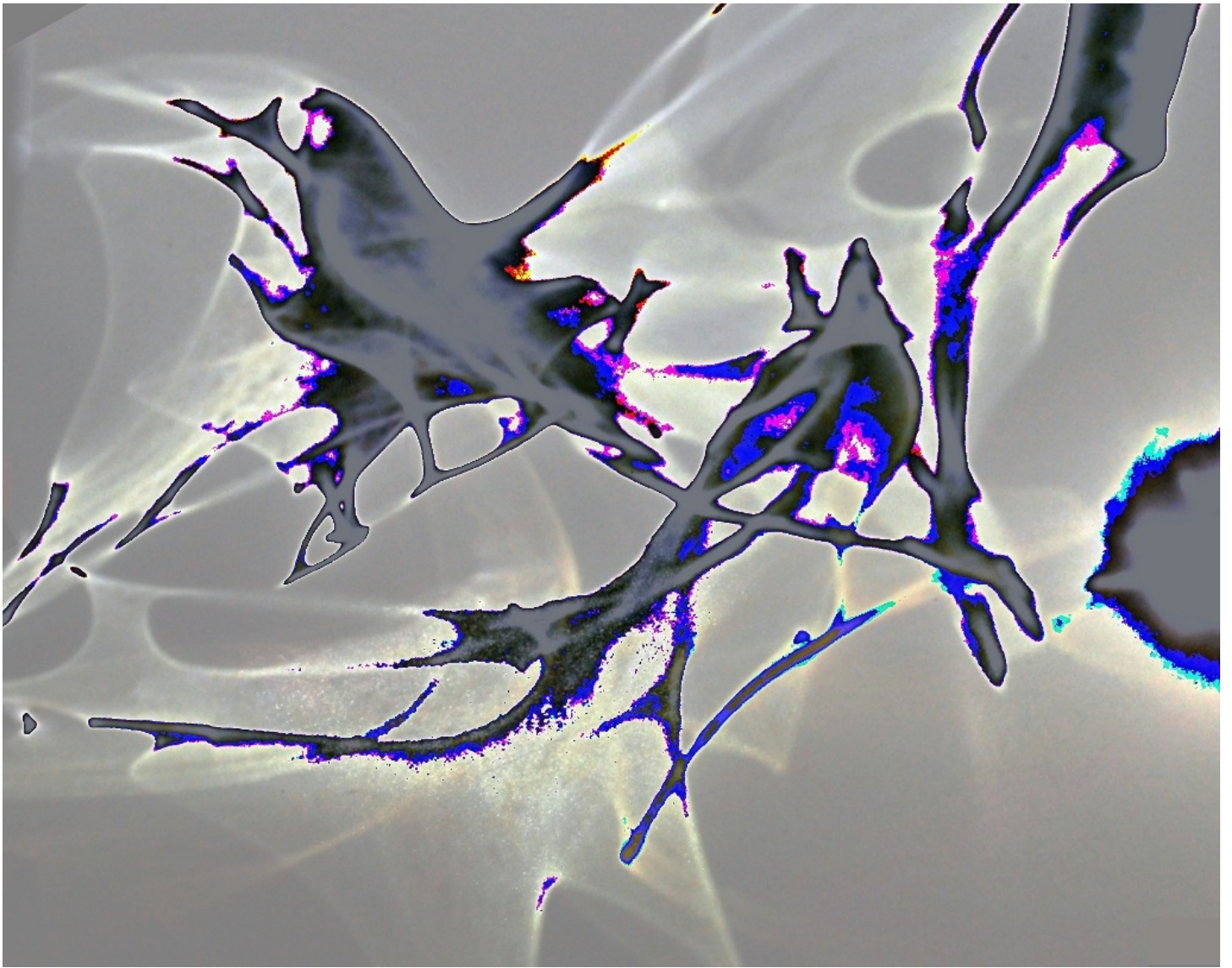
銃の眼に、はじめ幾本かの灌木が立ちはだかつては沈み、やがてゆらゆらとひとりの男がこちらに向って歩きはじめるのだ。

かれは、あの種の倦怠を憎んだ。小動物のくせして、人間づらをさげているのだ。かれは、近づいてくる者を憎みぬいた。（……あの擬態を、なぜ愛嬌とってはいけないのだろう、装うことで自らを敵にひきわたす無邪気さを、なぜ……）

その直前の大気のまばゆさに、視界が引金に集約されるやいなや、標的はその意味を引落し、羽根や尾、飛行や疾走、いっさいを投げだしてしまうのだ。かれはすくみあがる、いま生が地上一・五メートルの高さのなめし皮をつんざき、のどもとの小さな空洞をつらぬいて、そのままとある小枝にからみつく。かれは吊るされた、殺される者は、その一瞬をしか生き得なかったのだ。かれはぶるんとひと跳ねした。

バスの中のかれは土のいろをしている。節ぶとの指で小鼻の脂汗をぬぐうと、呑みこむ呼吸は海の味がする。だがここは、海からははるかに遠い野の道だ。





## section7

死者が編む籠の中には

祖母はわたしの耳に、あのつるっと皮がむけるような息を吹きかけました。祖母の打ち明け話には、いつもその背景に納屋があり、すべりの悪い戸があいたり閉じたりしていました。あけたのはまちがいなく父です。しばらくして閉じに行くのは、だれだったのでしょうか。

《あれは、納屋の空気を入れ換えるくらいのできごとだった！》

堅い空気の舞台上、がらくたは少しばかりの光と闇とに囲繞されていました。腐敗するものなど、ひとつだってありはしませんでした。あるとすれば、堅い空気そのものにちがいありません。

醜聞は、あの戸が閉じられるたびに町にあふれたのではないのでしょうか。閉じに行ったのは、だれだったのでしょうか。

《密通》に蝕まれたのは、わたし自身でした。それがわたしの生理でした。死者はむしろあまりに靱くしなやかなので、籠が編めました。籠にはいくらでもわたしの生を摘むことができました。清潔な竹べらがいくつもわたしに向けられていました。

あれが納屋の空気を入れ換えるほどのできごとなら、いっそ納屋の戸を取りはずすべきなのです。

ぎっしりと並んだ鳥居のように、表情のむこうにいくつもの表情が透けてしまうので、可笑しいのです。ときにはわたし自身の顔が映っているものと錯覚して身ぶるいしたり。たしかに祖母は《無表情》へとかぎりなく接近していたのです。ただひとつ、それが生き延びる方策であるかのように。けれど、それも祖母の《密通》にほかありません。祖母は、わたしを共犯者に仕立てるつもりだったのです、おまえも知らん顔をしてるんだよと。

わたしにはついに《無表情》を理解できませんでしたけれど。

吐き気をこらえてかしいだ納屋でした。納屋の周囲をめくるめく速さでかけめぐる影が、納屋の昏倒を防いでいました。

その棚から一丁の錠を消すことは、納屋をいくらかでも現実離れした存在に置き換えたかもしれません。殺意にかられた父はすでに鳥でした。わたしの母の頭部は、鳥の巣であったわけです。





## section 8

### 回転家族の食卓

蠅がえがく曲線の円心へむかって、テーブルは現象する。この多角的な、縁辺の不明瞭なテーブルの不潔さかげん！

腐敗する物Jは、ゆるゆると翼を伸ばしはじめた。飛び立つにしても、どこへ？

蠅の無目的な飛行が扱びとったテーブルの形態は、火災のごときものであったために、無限な融通性を備えていた。食事をとる家族のうしろ姿は、どれも火急でありながら、かつ、いまや生を断念したかのように動じない。かれらもまた蠅だからだ。

腐敗する物Jは、テーブルの形態や蠅の属性とはかかわりなく、いかなる手、いかなるまなざしをもはねかえし、むしろ積極的に潔癖である。それは、絶えざる発熱、あれからこれへ、ここからそこへの、色彩の移行、におい、かたちの変遷、退行のうちに、あの融通性とは明らかに対立する独断の姿勢を保つ、誇り高き腐敗である。



物Jの表情を、われらは、しばしばまのあたりにし、それを物Jのすべてであるかのように解釈するが、発熱から発汗への音階的過程に捉えられ呑みこまれた結果の、われらの判断の愚昧さをこそ、飛び立てぬ腐敗とみなすべきである。

すなわち、《無表情》という表現が迫ろうとした表情のまえにあっては、われらは何者でもない。無として、なおかつ、《見る・見た》という屈辱、むずがゆさ、嘔吐感を背負いこむ。

だが、はたしてそれが事実だろうか。

事実は断じてこのようなわれらの思い入れを許しはしないだろう。嘔吐さえも、われらの慾望に根ざしているのだ。

しかるに事実へのわれらのいとけない秋波は、それを《見ない・見なかった》として、屈辱、むずがゆさ、嘔吐感をこらえる必死な自己欺瞞に自らを幾重にも呪縛するのである。

《無表情》が限りなく接近するところの表情が、腐敗する物Jの一瞬の現象を示すにとどまり、あのテーブルの淫乱でさえある融通性が蠅の属性にとどまるならば、それらに共通する限りのなさとは、死の存続を立証する〈時〉の諧謔にほかならない。《無表情》とは、われらの存在形式のひとつである。腐敗する物Jの仔、淫乱な者たちへの愛の配分が物Jの独断と誇示であり、われらは、ここで頭を垂れ、ひざまずく、どこへ、どこへ？ と。

## section 9

### 発育する死、つまり生鮮な腐敗について

腐敗の円環運動から、運動そのものを抽出してみるならば、そこには、発育ざかりの死が連鎖反応式に共棲している。腐敗する物Jの陽気な一面〈臭気〉は、これらの乳くささであり、自己中心主義の暈を競っておしひろげている。臭気は層を重ねながら、物Jをつつみ領野を拡大していくが、発育ざかりの死は、その自立性を物Jの中枢に確保している。そのため、死の発育につれて、腐敗運動は物Jの外殻へと反転する。波における水の上昇運動に酷似しているが、物Jがじっさいより膨脹してわれらに感受されるのは、波の高みを頂点とする感受性の硬化癖のためである。しかも腐敗は進行するとわれらは錯覚する。しかし、錯覚ほど十全にわれらを納得させるものもない。

ところで、こうした運動のさなかに、物Jのかつての生鮮さが復活したかのような随所の反応を見逃すわけにはいかない。

死は、定位置から無数の方向へ同時に歩みだす。一方、この多彩な指向性のなかには、はじめから定位置をめざす死がある。それこそが《無表情》である。これを生鮮さの核といえるのは、死 - 無表情ゆえのとまどいがわれらを襲い、つぎにわれらをしてとまどいを死 - 無表情へ反射させているためである。周囲の決然たる指向性のなかにあって、とまどいは、無目的な形相を帯び、それゆえにかえって放浪という動向をわれらに予感させる。それは、生鮮な物Jへの帰家本能であり、発育と死を短絡させる物Jの記憶像である。

とまどうわれらもまた雄大な腐敗の風景である。

そのとき曲線は陥穿そのものの連続的な運動である。

それは、自らをおとしめることによってわれらの前に現れ、われらのすべての直視と、直視されるすべての〈もの〉とを妨害してきた。われらはなにものをも凝視しえない。あらゆる〈もの〉は絶えずわれらの眼前から逃れ去る。

しかし、兇器・物Lの空間的限界を確認する困難さは、その運動の自閉症的な性格のゆえではなく、むしろ、積極的とさえいえる流亡性にある。兇器・物Lは、たんなる道具から転落すると同時に、感性あるいは倫理性の具現として、独自の《手》を獲得するのだ。だからいかに流亡とはいえ、孤立することはなく、物Lは、物もでない〈もの〉につねに癒着している。

こうして物Lは、陥穿群のうちに弧をえがき、たとえば物M、たとえば《納屋》のごとく現象する。

それは因習の納屋だ。物Lは、この病原体に紛れこみ、兇器として培われ洗練される。そしてやがて風媒花のように流れ飛び、選ばれた者の頭部へふりおろされる。



## section11

### ひとと称する最悪な事故

わたしは見ていたのでしょうか、見ること見ないことを選択すらままにならないときに、それは風景じたいが盲目であり強制的でありしたのですが、わたしにはただ拡がりも奥行きも漠然とした《白っぽいもの》でしかありませんでした。

風景の側からすれば、わたしの存在は、拡がりの中のひとつの突堤、奥行きの、とある暗渠、あるいはそれらしきものの影でありえたのでしょうか。距離をもつ契機として、風景から凝視されはじめていたのでしょうか。

視力は、白っぽいものの涯から、《白っぽいもの》と表現しうるそのことのように、あの突堤を越え、暗渠をくぐってやってきたのでしょうか。

それは、《白っぽいもの》でありつづけました。視力から記憶へと焼きつくまでには、およそ数十日を要したのでしょうか、その日に、わたしの周囲の人びとは、顔つきからそぶり、はては声までも変ってしまったらしいのを、わたしは一種の音楽的雰囲気として記憶しています。このことを映像のうちにもちこたえているためには、わたしは少なくとも歩けるほどに成長していなければならなかったでしょう。あれらの人びとの転落にしたところで、歩行なしにはありえなかったのですから。

それにしても、あれらの人びとが、なお人間のからだつきをしていたというのが、わたしには奇怪でおそろしいのです。もちろん、わたし自身は自らの形についてまだ知る由もありませんが。

さけば声は聞きませんでした。あの音楽的なものにかき消されたのか、それがあまりに瞬時のことで、声を出す違いともなかったのか、わたしにはわかりません。

ながいあいだ、雪の白さを記憶しているのだと思い込んでいました。そこへ朝日か夕日かがさしこんで、わたしはまともに光を浴び、顔のなかがすっかり真っ赤に染まって……。

でも、それは障子の白さであり、母の血しぶきが飛んだのでした。

## section 12

〈もの〉はしばしば威嚇的にしか存在しない

これまで一度たりともNayaーと称ばれたためしがない。とりたてて納屋らしくないというのではない。よほど天候がわるくないかぎり、あたりには白色レグホンやチャボがうろつき、ときにはザーネンが教頭つながれていたり、鼯や野鼠がかけぬけたり、近所のこどもがはいりこんで、仲間に外から鍵をかけられ泣きさけぶこともある。ごくあたりまえの納屋である。いや、あたりまえすぎて、もっと気体にちかい、濃縮された大気がそこに影となって泛かびあがった、といってもいい。

引戸の扉は、人を寄せつけぬ醜悪な木目を、露骨に、しわがれたようすで浮き出させている。漆喰には無数のまなさしが塗り込まれ、落着きなく脈打っている。それらがたがいに好戦的に反目しあっているのだ。

納屋ぜんたいの暗澹たる様相、冷酷無慚な仕組の数かずが表面化したような肌ざわりは、そこへ片付けられる〈もの〉の宿命をそのまま物語っている。〈もの〉たちはふたたび陽の目を見ることなく忘れ去られる事態に甘んじなければならない。なぜなら、納屋そのものの存在が、多々、忘却される性質のものだからである。Nayaーでも納屋でもない、まさに空無のままに放置されるのである。火災や洪水によって、ある日、意識は明確に納屋をとりもどすだろう。

それにしても、納屋が《.》<sup>ピリオド</sup>にしか見えない位置からでも、納屋と見てとれるという、ある種の自大な確信についても、いたずらに否定はできない。ただし、より正確には、《.》としか見ようとしないうし、見たくないのだろう。それは、再三にわたって確認されなければならないような、熱意や、熱意に内蔵されるすべての偶像を、納屋は破壊し排斥してきているからである。

しかし、《.》としてそれが見えるとき、見る者はその肉眼についての過信からして見誤ることば断じてあるまいが、納屋は、《.》としての納屋は、見る者に対してその位置が正当かどうか、見られている位置を全うしているかどうか、不安なのにながいにない。その核ともなるべきひとつの《.》、自らを収斂すべく物質的な窖<sup>あなぐら</sup>について、納屋はなんら規律や計算式をもちあわせてはいないのである。そこに持ち込まれる〈もの〉の配置の不文律が、納屋ぜんたいに浸透しているのかもしれない。

その内部の動向を慮ることなく、仮に、《.》が納屋を抽象しているとして、はたして、《.》と納屋の距離は、《.》とも納屋とも見えるとき、そうとは見えないものの側からすれば、それこそ永遠ともいえる距離であるだろう。

その距離にあって、血迷わない《.》や納屋はない。

そんな納屋から、あるいはピリオドから、兇器となりえぬ〈もの〉を引き出すのは、かえって困難である。〈もの〉は、それぞれの延長線が交わる地点では、それぞれ威嚇的にしか現前しえない。兇器は、不安の解体によって生じる副次的な〈もの〉の、瞬間への野生的倫理的な君臨である。兇器による生命への大いなる譲歩が、そこに苦悩のない安らかな肉性をもたらすのである。

その濃縮された大気の影響に、いまこそNayaーと呼びかけるだろう。すると納屋は熱を帯び、節ぶとの未発達な手をびくりとさせる。だからふたたびはNayaーと呼びかけてはなるまい。納屋は、あたりを見まわして、それから慄然としてNayaーになりすますからだ。呼びかけた者への殺意が、納屋の中で、そのときこそ確かな〈もの〉となるからである。



## section 13

吊るされて腐敗するもの納屋にあり

納屋は、腐敗の円環運動の中心に位置している。そこでアメンボのように静止している。アメンボは毛髪であり、ごくささいな気分の転調にも敏感に反応し、おおきくたわんだりするが、その脚は地中深く根ざしている。アメンボをめぐる空間もまた破裂寸前まで膨脹し、その天辺にはうすく雲がたたなわっている。アメンボはさらに、その空間の底に沈んで佇つ、かすり傷である。それはガラス壘のひびのような不透明な小枝にところどころ輝く結晶を実らせている。それを啄みにくるものもあるが、小枝の湿潤性は、そのものをもぬかりなく結晶化してしまう。このかすり傷が、病巣の納屋を予感させる。（かれは村を出る朝、なんとはなしに納屋に立寄り、戸をあけてのぞいてみた。かれには何も見えなかった。そして村を出た。）

雪の音いろのような糸で、腐敗は当初、吊るされていたのだろう、その感得不能な重量が、ヨリをもどすはずみとなり、ヨリがもどるにつれて腐敗は円環運動を獲得していったのだろう。アメンボの脚のあわいで腐敗の圭角がとれ、無数の真球となって回転速度を増していく。やがて納屋が渦巻状の空間として姿を見せはじめる。

納屋じたいは、嫌気性菌が酸素を避けるように、腐敗のただ中であって孤立している。腐敗の表面的な様相が地形図を呈していたり、ダイヤグラム状の線條を浮き出たせたりするのは、そのまま腐敗の旅への憧憬を示している。（数カ月後、村へもどって初めて納屋へはいったとき、かれは、自分がいったい何のために何を手にすべきか、一瞬、忘れてしまったのだ。それから、バイタ、とかれは呟いた、バイタ！）

## section 14

### 一撃なり

鉈\*ははじめささやかな風であった。

風は、思い切るように敷居をまたぐと、土間のなかほどで、たちまち縄とともになわれた。怨念は、ないつがれ、框を越え、裏庭にぬけて納屋にはいり、ひとりの男を吊るすまでに至った。男は右に左にゆっくりと揺れた。縄から、風のみが解きほぐされていたにちがいない。揺れる部分を剥ぎおとすと、在るべきところに鉈はたしかに残った。

刃のかがやき、彼女のあの《白っぽいもの》の全体が、この一閃光ではなかったか。

男は納屋から母屋に引返して行った。かれは、いままさに人間の姿をまっとうしている。

握りしめたもののがんぜない重み――生れたばかりの小さめの赤ん坊ほどの重み――が、かれの不浄な妻の脳天へと移し置かれた。

ただの一撃だった。

\*刃渡り六寸五分、柄の長さ一尺五寸。先端に通称トビという突起がある。地面などにあたった際、刃がかけるのを防ぐためである。

## section 15

### ひかる納屋、錆びた人

だれもその納屋を見おとすことがないように、生えのびる指はただちに刈りとらねばならなかった。そして、ただいっぽんの指のみが、いくらか屈折した細い野の道と、そのはてに建っている納屋とをさししめすことができた。

おんなはていねいに礼をのべ、納屋をめざした。彼女の背は祝福されていた。

納屋の柱や梁が、おんなの従順な垢で光り、彼女の骨が発するような体臭を放ちはじめた。そして納屋は、納屋自体の熱量の歴史をもって、自らの指紋を彫るまでになった。雪にすっかり覆われてしまっても、雪の上か、あるいはそのあたりの青空に、かすかにだが、指紋が見てとれるのだ。（殺人者は、ある日、唐突に指紋の縁辺に生じ、その狂気が雪を掘った。納屋は見通せた、が、男の姿は、まだだれの目にもとまらなかった。）

納屋の年輪は、あの寸劇に比して、大きくゆるやかに、大地を、大地にすがりつくものたちを、ゆるがしていたにちがいない。納屋はすでに巨大な不幸を張りめぐらしていた。だから納屋は、それに輝きをもたらしたおんなや、そこからまっすぐ罪科へと歩み出た男を忘却することなく、かといって、かれらのあまりに塵芥じみた存在にわずらわされることもなく、さらに素朴な砦となりえたのだろう。

清潔な、狂いのない風に、糸状の幾筋もの窓がほつれていた。つまり、それは板張りのわずかな隙間なのだが、光は、さらに遠く脱出を試みて、やせおとろえた触覚をゆらめかせていた。納屋はものの背後のための全的な支持であり、そこに在りながら無しとされる〈もの〉の、最後の結晶である。それらは、たんなる光としてしか外へ出ることがなく、しかもつねに不幸の内部にとどまっている。

いまや納屋は、光の巣ごもりの気配にみちていた。納屋の外には、視力の衰えたおんなの眼が、さめたギンナンのように黄いろくころがっていた。

おんなは、何にむかって腹這っていたのだろう、雨をたっぷり含んだ崩れやすい何かの岸辺だったか、彼女自身なかば腐りかけた棒杭のようなものだった。

おんなは目をあげた、すでに考えられる視線ではない、失望したり、わが娘を抱きしめたり、ましてや過去の不貞をたどる視線ではない。



だが彼女は、もう一度、視た。白っぽく光るもの、納屋から持ち出された、いまそこに在るのではない〈もの〉を。それを初めて視たとき、彼女は、自分の耳の生えぐあい、首のねじれようが、以前とまったくちがっているのを感じた。それは自在にすべての物音を聴きわけることができた、それは自在にもものありさまが確認できた。納屋の中のあの〈もの〉たちと、やっと平等な存在を克ちとった……

おんなは最後の血をふりしぼった。いかにしても破壊されることのない執着があれば、鏡の中の頭部は、まだ完全な一個なのだ。彼女は、もう一度、視た、自分のうつくしい横顔を。

《手》を消す。

兇器・物Lの最終的な目標は、《手》を消すことである。

道具の、《手》への侵襲は、われらよりもはるかに孤立するだろう。

《手》を消すことは、兇器の道具としての復権であり、それにはまず《手》から離叛することだ。すでにあったものへと回帰することだ。これから起ることは、これまでになかったことである必要は、まったくない。もし、それをする勇気さえあれば、すでにあつたことを、そっくりそのまま繰り返すのだ。それが道具である。妻殺しから、納屋の隅へと遡行し、ふたたび納屋から母屋へ妻を殺しに……。それは、兇器から道具へのより良き道であるだろう。あるときふいに妻殺しを断念するかもしれないのだ。

ル・クレジオはつぶやいた、《理由はあとからやってくる》

われらはこれをさらに劇しく正確に銘じなければならぬ、理由は永遠にわれらに追いつくことがない、と。

われらは、理由とのかくも頑な訣別を、反古にしたりしないだろう。手や夢へ、夜闇にまぎれて帰って行ったりしないだろう。

兇器・物Lは、あらゆる理由の《手》から巣立つのだ。

兇器・物Lの飛行の構造から、生爪のように、そらが、空間が欠落するだろう。飛行から存在へ、体温から納屋へと、物Lは旋回する。空想は歩き出せない、飛行の構造にあの《白っぽい》時間がこみあげる、空想は汚物でいっぱいだ。

物Lの飛行は、いっそう音楽へと接近するだろう。そして、ピアニストのそののように、《手》は一個の音符へと解消されるだろう。

(われらが手を失ったのではない。手がわれらを見限ったのだ)

それからのち、物Lは、われらの行為の構造として、鈍く光っているにちがいない。

死臭は小さな漁船だ。ほんとうの漁船について、ぼくは何も知らない。漁船が魚を追って、波にひらひら舞っているという、ほんとうの海をぼくは知らない。

ぼくが知っているのは、あなたがた家族が、ぼくのなかで漁船になったこと。あの夏、太陽がじりじりと近づき、漁船が《白っぼく》ひかり輝いていたこと、屍体は陽灼けしないこと。

ほんとうに、あなたについて何も知らず、死臭はひどくなるいっぽうだ。

漁船がゆれ、吐瀉物のあふれる空想をかかえて、ぼくは揺れた。そして……水鳥が水から飛立つ。

風の球を左右にゆっくり押しやる翅がのびきると、ちいさい頭部が撃たれたように上向く。嘴はやがて炸裂する弾丸だ、するどくとじて、もう眼の前を飛んでいる自分の幻影にふかくくいこんでいる。くいこんだ部分が水鳥の空白となる。幻影と実体の重複が水鳥の飛行を支える。翅はいまや流れる水だ、幻影を押し流し、実体を曳航する、翅はいまやひかりを砕く水の熱だ。水中に巻き起る風が、倒立した樹や岩肌を燃やしたなごりが、翅を熱くする。火の粉が舞い、樹脂がしたたる、落下への熱望が水鳥の眸をくらくする。暗い眸は浮力を鎮める錘だ、同時に車輪だ。回転運動が水鳥の上昇角度を宥め、そらはさらに青へと没頭している。空白は空間の盲目、盲目の速度が水鳥の意欲、意欲はいまそらの青さと合致している。青が走る、追う水鳥は水だ、虹のような飛行が風の球を細分化する。気流ははるか下方を濁らせているにすぎない。水鳥は気流にのらない、すでに頭部は石化し眸は錘だ。翅は押し寄せる風の素粒子を左右に押しかえす水平に流れる水だ。水源地の鼓動が風を裂き、過剰な水をしみこませる、水鳥の極限の軽さは発光するほどだ。和毛はすでにひかりだ、距爪をふかくつつみこんで、ともに窒息したひかりだ。

水鳥が水から飛び立つ。かれを拘束してきたいっさいの水から飛立つ。

幻影はぬれて重い。ちいさな頭部が下向き、水鳥は嘴から炸裂する。それから実体の緩慢な下降がはじまる。空間の開眼が水鳥を呑む。射程距離での恍惚が翅を静止させる。意欲はいま地上の銃口と合致している。

## section 18

### 赤い舟による川下りのイメージ

夢の川の舟下りの船頭は、すべて片眼だった。眼窩にしなびた瞼がいかにも陰鬱に貼りついていたり、あるいは、まるで両眼が健在であるかのようにみえても、一方は義眼なのである。

船頭の視野から墜ちかかる風景は、むきだしの岩肌である。

船頭があやつる竿は、われらの生あたたかくやわらかい肉の中に突き立てられる。われらの血しぶきは舟を染め、舟にすがりつくのは、舟下りをたのしむあかい口だ。

船頭の盲目の眼に汗がひかり、百粒の汗に百艘のあかい舟が彎曲にうかんでいる。船頭の視野の外をわれらは滑走しているのだろう、岩肌のとある樹の根にからまれながら。

船頭の生活する眼に残像として積みのこされる観光客がひとりふたり、あるいは何万人もいて、もちろんかれらはいまわれらの舟にはいない。（船頭たちは、あす、どのような運命の上に立つのだろう。）

あの千鳥たちは、われらの飛翔である。

川下では、鳥類の卵のようにカメラマンが岩に嵌めこまれている。だが、われらがかれと出合うとは限らない。

あの千鳥たちを見よ！

船頭は訛りのつよいことばで、われらの眼をカメラに向けさせようとし、あかい舟に一瞬、重心のたわむれがある。

## section 19

### 飛翔欲と飛行の構造

水のまわり道をたどっていく、われらにいかなる泳法が身についたというのだろう、かすかに酢のにおいをたてながら、われらの歩みは、いっぽんの天蚕糸てぐすのように、まだ見ぬ水の底へと降り立っている気がするのだ。

水のまわり道をたどるわれらは、たがいに他者の流域にひきこまれ、馴れた手つきで波は、われらをまっ青な海に仕立てるのだ。

われらはひとつの海鳴りである、冷たさあたたかさ、ぬらすのであり、蒸発するのだ。

かつてわれらは腐敗する物Jの腐敗の円環運動を脱落し、さらに自虐的に蒸発へと歩いてきた。それはわれらの抑圧された飛翔慾の燃焼行程である。

われらの飛翔慾は、ほかならぬ水によって規制されてきた。

かたちに従順な水は、それなりに多くのかたちを内包していたのであり、かたちのひとつにすぎない《慾望》もまた水に内蔵されていた。水をみつめていて、ふいに襲ってくる、腋の下や膝の空疎感くうそかんは、ゆえなきことではなく、それは飛翔慾の肉体的な覚醒であり、追体験である。われらはここで、ついに葬り去られることのなかった飛翔慾の核としての自らを発見する。

飛行は、腐敗あるいは蒸発を鳥瞰する構造である。

酷寒の二月、北陸の海は浴槽のごとく朦朧と湯気をあげ、飛行する物Oは、腋の下のようにうすく汗ばんでいる。上昇気流の澄明さ、痴呆じみた楽天性のただ中から、物Oは、引揚げられることのない《死》を見ている。われらが水によって規制されたように、物Oは飛行の構造の裡に探くとざされ、なおかつ、ある〈もの〉への浸透を余義なくされている。

しかし、飛行する物Oの水性は、われらの最後の自由のひとつであろう。われらは、苦痛や悲哀によって手をぬらすことができ、ぬれた手は、この大気の中で花のように咲き誇りさえするのだ。

水のまわり道を、あくまでも遠まわりに氷河期へと遡行しつつ、飛行の構造は無限にうづくまる。



標識《妻殺し》は、その貪食性によって肥満し、自らの醜怪な容貌を羞じて行方をくらませた。

いまや《妻殺し》は手足の区別さえつかぬ、ものいわぬいくつかの眼をその肉体に嵌めこんでいるばかりである。彼女の棲みついた山脈ぜんたいが、われらの地図に死臭を染みわたらせる。

それでもなお、妻を殺害する気になるだろうか、それがわれらの唯一の愉しみにしても。

標識《妻殺し》を見失ったのではなく、いままさにわれらが標識《妻殺し》を実践しているのだ。

ところがわれらは、われらが真相であること、われらが標識《妻殺し》として林立し、遭難していることを信じていない。

つねに逆上している標識のなかでも、とりわけ《妻殺し》は、拡がりや奥行きを失神させ、あの光景の母胎をえぐりとった。そしてその母胎では、正気な標識《妻殺し》が無数に捏造され、市場に出回りはじめている。われらは容易にしかも正當にその道を歩むことができる。

標識《妻殺し》はたしかに存在した、何もかもを見過ごすわれらの眼がそれを見た。

不倫の汗、頭蓋が砕けるにぶい音、ほとぼしる血の匂い、それらもたしかにわれらを狂喜させた。だが、ついにわれらはその現場に到達することがない。

さて、われらはなぜ、いまにも朽ちて落ちそうな小枝を相手に、こうも勢いよく鉦をふりかぶらずにはいられないのか。そらはリスのように快晴へと捗り、その青さは鉦の上にとどまる。鉦は鉦、怒りは怒り。その二つの〈もの〉の印象半径にたちあらわれた《妻殺し》は、あかく熟れたからすうりのごときものであったか。

## あとがき

---

『兇器L詞書』に関するメモ――2011年1月

\*1974年11月から1976年12月まで連続して執筆した「恋人よ、ふしあわせに一〈もの〉から夢へー」を改題。

\*総35篇のセクションから21篇をえらんで構成、配列は執筆順に非ず。

さらに、刊行本のセクション17と18をつなぎ、計20のセクションとしている。

刊行本の誤植を改め、手を加えた箇所もある。

\*刊行本では見出しをsection 1、2…としているが、ここではそれぞれ新たにタイトルをつけている。

\*初出誌

第三者／詩現象／魔法と新説／日本未来派／天文台／ゑひもせず／詩界／四次元／水葬／燈台  
／花祭り／カウボーイ

(刊行本＝発行／1977年8月 発行所／ワニ・プロダクション 1978年第10回横浜詩人会賞)